昭和46年度秋季大会回顧座談会

講演企画委員会

札幌支部の方々の絶大な御努力により，立派な記録が出来ました．座談会は大会の最終日8日の午後に札幌自治会館，梅の間において行なわれ，テーマは内容の回顧，会の運営上の感想，地区研究の問題点の三つでした．

出席者，大井，小沢，内藤，木村，館（司会）（講演企画委員），藤範，杉本，鯨井，中岡，千島，丸山，山崎，斎藤，竹井，大川（札幌管区），菊地，周，孫野(北大)，広田，林，志尾，山下（東大），神山（気研）その他．

司会　今回の大会は全般的に準備がよくできていて評判がいいようである．これは特に札幌支部の皆さんの努力によるものと思われるが，それについても後によく聞かせて頂きたい．先づ今度の学会についてはどうでしたか．

H　力学の部門では私自身大変おもしろかった．ただし発表者やディスカッションする者がいつもと同じ顔ぶれであったようだ．アレンジメントなどは余裕をもってうまくいったと思う．

司会　メンバーが同じでなくするには？

H　それについては後ほどふれるが，もう一つテーマが固定してきた感じがする．たとえば，回転流体の室内実験やメソ，ミディアムスケール，プラネタリウェーブ等まとまってきたようだ．

H　日程についての一案だが，たとえば今回の場合最終日は午後もやることにして，最初の日の午前中をあけておくというのはどうか．

司会　前日から来ている人もあるので，今後の問題として考えたい．

M　飛行機で来る人の都合もあり，Bさんのような意見もあったが．

K　ケジュールについては個人的に違うので全般的に処理するより方法がないのではないか．

Y　気候と応用については1日目は時間的に余裕があったと思う．中身はおもしろかったと思う．

M　応用気象部門は内容が多岐にわたっているのでむずかしいとは思うが，部門の選び方，座長選定などにもう少し考慮を払う必要がある．

Y　雲物理についてはいつものように予定どおり進んだが，北大の人達が事務的にいそがしかったのか討論が白熱しなかったのが残念だ．欲をいえば札幌でやるからには雲物理の部門は北大関係を主としてシンポジウムなど特集で扱ってほしかった．

M　会場がわかれているので私もYさんの発表を聞けなかった．会場係は北大で受け持ったが，なるべく講演を聞けるように手配したはずです．しかし責任者になるとそうも行かなかった．

司会　大変だったと思うし，むずかしい問題だと思う．

M　札幌でやって聞けないのは変だと思う．

H　熱帯気象については，前半が解折，後半が理論となっていて大体バランスがとれていた．ただ会場が広い割合に聴衆が少なくもったいないような気がした．5年前の札幌大会の時から熱帯気象の部門ができて，その時はおおぜい集ったが，最近の熱帯気象は目新しさではなく，深みのおもしろさの方へ質的に変化して来た．今では力学と本質的に同じで熱帯気象として分ける意味がうすれたと思う．今後のプログラムでは内容を考慮して組合せればもっと人が集まるのではないか．

司会　部門のまとめ方に問題があるかも知れない．

F　熱帯気象の時に第二会場で総観気象をやっていたのでその方に人が集まったのではないか．私は両方聞きたかったが．

N　熱帯気象の中にメソ気象的なものもあった．

O　総観気象の部門については，時間は十分にあった．発表者も発表時間を守ってくれたので十分討論もできた．それに総観気象以外の人々がいろいろと質問されていたが，ただ難をいえば，力学関係の人の質問がほしかったと思う．それにスライドが大変多い人があったが，聞く方は困るのではないか．

S　二日目の総観気象を担当したが，第一会場で熱帯気象をやっていたがたくさん集っていただいた．時間の

余裕もあり進行状態も良かった．内容も現業的な面が多く私自身もわかりやすかった．希望として，道内から現業関係の人達も来ていたが，その人達の質問が少なかったようだ．内容的には非常にその人達のためになったと思う．会場の点ではマイクの声のとおりが悪かったがもう少しくふうすべきでないか．

L　ワイヤレスマイクを考えたが，借してくれる所もなく困った．

N　境界層の方にでてみたが，今までこの部門では地面や海面に近いところの話題が多かったが二日目の中で，もう少し高い所の観測の話がでてきたのが注目された．たとえばゾンデ，バルーン，ライダー，音波レーダーなど使えるようになったのでこの部門は興味深くなりそうだ．三日目かに大気汚染の測器関係を聞いたが，数件とりやめ，時間的に余裕ができ座長がうまくアレンジして，問題の所在，歴史的なバックグラウンドまで話したので時間が有効に活用されたようだ．

H　シンポジウムのことで述べたいが，地方でやる大会の場合ローカルな特色をどのように出すか，問題があると思う．新潟の大会（38年のテーマ北陸豪雪のこと）ではローカルな問題とタイミングが一致してうまくいったが，今回の場合でも最初に山崎さんがだされた問題も後の方では関連がうすくなった気がする．一本でやった方がよかったと思う．

司会　今回は北海道支部の希望にそうようにしたが，結果的にHさんのいわれたようになった．次の新潟大会では新潟の方の希望を優先して決めたい．

O　大循環は実体を見ることができないので，討論も水かけ論になるおそれがある．今回のは数値実験の話があって札幌ではよかったと思っている．

H　東京でやるときは総合報告的なものを，地方でやるときは，地方にあった生のものを考えた方がよい．

Y　新田さんや松野さんの話もおもしろかったと思う．成層圏の前兆現象は長期予報の一つの目の付け所だが，目の付け方が参考になった．

K　テーマと誰がやるかは早い時期にあたり，全国の人から参加してもらうようにすれば討論も活発になるのではないか．

司会　今回も話題設定はかなり早くからやったが．

K　討論を盛りあげるために学会でも予算的に若干の費用を見るようにしてはどうか．

M　ローカルなものといっても，いっぱいある時もあるし，品切れになる時もある．やってほしいものがたくさんある時はインフォーマルミーティングを活用すればよいのではないか．

司会　その点についても次回から十分考慮したい．

（会場の準備について）

司会　会場の準備とか運営が非常にうまくいったという話を聞いているが，

N　会場の選定は，三つの会場が一つの建物の中にある所をさがしてほしいと本部からいわれたので5～6か所候補をあげてさがしたが，いずれも会場費が高くて困った．りっぱな所はいくらでもあるが経費との折り合いがむずかしい．

K　他会場でもやっている講演のナンバーが表示されていたが，これは必らずしも必要なものか，人員的にも無駄ではないか．

H　私も同感だ．

N　京都の例でも，行ってみたら終っていたということがあり，表示をやってくれという注文があった．

M　電光掲示板などがあれば良いが，表示のためかなり人員を要したことは事実だ，両方の希望があるのでやれるところはやってもいいんじゃないか．会場は大きなのはいらない，小さな会場でよかったのではないか，

司会　今回は大きな会場を取れたが，一般には大きな会場は取るのがむずかしい．

N　第一会場は150人くらいはいる部屋が必要だといわれていたので多少無駄でも大きい所にした．

M　無料で借りられるならいいが，会場費の高いところでは聴衆がガラガラでは無駄な気もする．要望どおりの丁度よい所が無くて困った．

司会　次回の新潟大会では慎重に準備したい．次に会期が4日間だったことで長すぎるという意見は無かったか．

K　4日間全部聞ける者は少ないだろう．全部聞く人にとっては長すぎると思う．

司会　研究所から参加した人は旅費の面で不満があるようだ．特に例年より少なかったので．

N　240～250人くらいで，前回の京都では約300人あったが，札幌は遠いので京都より多少すくなくなるのではと思っていた．ほぼ予想どおりの人数だ．懇親会には今回は133人出席した．参加者に比べて懇親会の出席率はよかったようだ．

司会　懇親会は大変好評だったようだ．

M　今回から参加料をとることにしたが，これについてはもめていたのでご意見をうかがいたい．

司会　とる前には問題になったが会場では不満の声は聞かれなかった．

H　大会に要する費用に比べ参加料でまかなう分のパーセンテージはどれ程か．それがわずかならとる必要はないと思うが．

K　今年の札幌は学会ブームで寄付集めには相手方がシブくて苦労した．寄付に頼るのもこのへんで考える必要があるのではないか．自費でやれないのなら参加料をとるのも止むを得ないだろう．

M　参加費をとることに対して本質的に反対だという意見があるので困る．寄付集めが困難になるとやはり参加費にウエイトがかかるようになるが，札幌大会から参加費をとる事になって弱った．

F　参加料は非会員の方が高いのはどうか，予稿集を買わされたうえに参加料300円を払わされた人がいて気の毒に思ったが．

T　私はおもに接待の方でしたが，記念写真の場所について会場内に適当な場所がなく雨が降ったときどうするか，と苦労したのはそんなことです．

（地区研究のあり方について）

K　インフォーマルミーティングではこのことに関連した問題点が出されたそうだが，出席された方から大体のまとめをいってもらって，それに付け加えて討論してはどうか，それから若手グループの会合の方も．

W　若手会では，若手技術者の養成，大学院研究生の養成について討論したが，一番問題になったのは先の見込み（就職先など）がないということであった．気象の研究をやめて民間会社などにはいればすむことだが，進んで気象の研究をしているからには今後も続けてやりたいと思うのは当然だし，その必要性も感じている．一人前の研究者になる働き場がないのは問題だという意見が多くでた．

X　現場の若い人でローカルな問題と取り組んでいる者から見れば甘い考えといわれるようで反省する点もあるが，この問題についてはわれわれだけでどうこういっても仕方のない問題なので，学会でも取りあげてくれるよう要望する．気象の現場の者も研究者として育つ必要があると思うので一緒にこの問題について考えてほしいと思う．

司会　学術体制という意味で大気物理研究所をつくる案があるが，学術会議としては気象の技術者，研究者の層が他に比べうすいので改善してほしいという要望を近いうちに政府にだすことになっている．そこでその問題も取りあげられるはずだ．

K　若手研究者のためには，学術会議としても勧告をしており，その中で大学院の研究生が研究活動中の災害に対して保障がないので，保障をするように要求している．

司会　気象庁の中では，学術会議に対して気象庁は技術官庁であって気象研究所のみでなく，現場でも研究調査が必要であると主張しているが，学術会議では取りあげられていない．その理由は気象研究所は特殊なものであり，他の官庁では研究所は多くの研究を行なっていても，現場ではする必要がないようになっているからだ．気象研究所としては意見書を所長から長官にだしているが，まだ実際の処置はされていないようだ．それから地方にも研究所を作るということも考えられている．

K　卒業生の就職先が少ない理由の一つとして，新制大学の地学の教室で気象の専門家が少ないこともある．このため地学の教室に就職することができなくなっている．

司会　札幌の理事会で，「天気」や「集誌」の編集委員が中央に片寄りすぎているので，地方でも編集ができるようにしようということが討論された．これについて印刷は東京でやるにしても地方で編集をやり，編集委員長を地方の人がやってもいいし，現状では地方が無視されているという意見もあったようだ．

S　現状では地方の人が「天気」に投稿する場合は編集委員を経由することになっているが，

M　札幌では編集委員のところへ論文があまりこないが，積極的に集めなければならないのか．

K　北海道の会員が投稿する時に必らず編集委員を経由しなさいとは書いてない．私達は直接東京に送っている．

H　地方の管区気象台の調査課長が自動的に地方の「天気」編集委員になっているが，地区の研究会でどんな研究があったか報告してほしい．その中でいいのがあれば「天気」に発表するようすすめるのもいいが．

S　気象庁の者は部内に「研究時報」があるのでどちらに投稿するか迷うこともある．

M　研究時報は何でも気軽にのせてくれるので，なくすることはできないだろう．

司会　「天気」はもっと論文を多くのせるべきだという意見がある．頁数は制限されているのか．

H　投稿が多ければ頁数を増やすことはできる．

M　編集委員会は投稿論文をきびしく審査するような

ことはないのか.

H　そんなことはない．それからこれは必らずしも地区研究の問題にならないかもしれないが，気象学は大きな計算機による数値実験だけではなく，あくまで自然現象から出発しているはずだ．身近なところに問題があり，理論はそれから作られるので出発点でおもしろい現象があったら，シンポジウムなどで素材としてのおもしろさを多くの人にみせてほしい．

N　大学以外のところ（現場）で研究をやる者は時間的，体制的にできにくいふんい気があるという声があるが，学校をでたての時はそれほど感じなくても数年たつとそんなふうに感じてくるようになるのか．

Y　インフォーマルミーティングでも述べたが，根本的には気象庁が行政官庁であることにまちがいがあるようだ．私のところでも時間的，物質的におもしろくない状態にある．これはわれわれの責任もあるが学会でも側面的に援助をお願いしたい．具体的にいうと，測候所などでは外国の文献が殆んどないし，研究会のスライドの外注の費用もみてくれないなど意欲をそがれることもしばしばある．予算の面で昨年は調査研究費が50万円程本庁から来たのでよかったが，管区はまだいい方で小さな所はもっときびしい．たとえば地区測候所では1日2回の予報を出すために必要な時間は約4時間程だがそれ以外の時間は全部他の仕事が割り当てられている．雨量観測網にしてもレーダーの情報以外は雨が降ってから3時間もあとからはいってくるようになっている．今の状態はなんとかしなければならないので学会でも援助してほしい．

司会　地方気象台，測候所などの調査のための費用はどうなっているか．

M　昨年は管区実行調査研究費・本庁特別調査費と合わせて約70万円を配分した．

Y　規則にのっていないものはやらなくてもよいという傾向がだんだん深まりつつある．予報などは規則にのらない部分が多いのだが．

司会　地方の研究は規則でうたわれていないので所長の考えで違いがでてくる．研究は気象台の仕事の重要な部分だが，それをするためには交替などで他の人の善意に頼っているのが現状だ．

S　現場の調査と研究所の研究の区別がどこにあるのかも問題だが，この間の橋渡しがないようだ．研究所の成果も現場におとすようなパイプがなければ現場の技術者から見捨てられるのではないか．

T　現場でできる重要なことは現象をみつけることと，それについてのアイデアをだすことだと思う．気象庁内に限っていえば現場の研究を生かそうとするなら，アイデアのある人を研究所に集めて研究所の専門家が援助，指導するということをしてもよいのではないか．気象庁の研究所であるからには現場の研究を吸いあげて現場に成果を還元できるシステムを考えてほしい．今は現場と研究所は離れすぎているようだ．それから大学などでやっていることと気象台の現場でやっていることの間につながりがないような気がする．大学の人も気象台で日常使っている知識がわかればプラスになるし，大学は質的に研究者が多いのだからアイデアを重ね合うことは人の経済にもなると思う．

司会　研究所では「大気」という雑誌をつうじて地方との交流をはかっているが，現在は研究要員そのものが削減されており，地方との交流も十分にやろうとすると他のことができなくなるという事情もある．学術会議からは削減反対の申請がなされているが，削減はそれに関係なく行なわれている．Sさんがいわれたように研究所の存在理由が失なわれるという意識は皆さんがもっているので，今後どうするかは真剣に考えたいと思う．

H　アメリカの Weather Beurau の NNC へ行って聞いた話では50歳近くの人が現場の仕事をやりながらマスター称号をとっているそうだ．これは多分規則上でもそういうことがエンカレッジされて行なわれているからだと思う．日本でも同じ気象庁の中では法的に問題はないと思うが，そういうことは本来行なわれてしかるべきであり，今まで行なわれていなかったのは大きなエラーで，希望が実現されることは当然だ．気象研究所の方でも枠にとじこもることなく交流すべきだと思う．

K　地方の研究の停滞をどうすればよいかということだが，問題は地方には人がいないということだ．たとえば，地方官署には学会員も少ないし，リーダーシップをとれる人も少ないので，測候所で外国誌をとっても読める人が何人いるか疑問だ．

本来は研究所から研究員を地方へ送りこむことが必要であるのに，今は道内の地方で研究している優秀な人を中央へ集めているという傾向がある．これは本人のためにその方がよいということだが，地方としてはかわりの人をよこしてもらわなければ困る．

W　管区や地方での研究環境がととのっていれば中央へ呼ぶ必要はないはずだ．地方で外国雑誌を読める人が少ないというのも，読めないような環境であることが問

（表紙3につづく）